エクリチュールの社会学の構想
—メディア論からエクリチュール論へ—

Ecriture‘s Sociology Initiative
—From Media-theory to Ecriture-theory—

炭谷晃男[1],前納 弘武[2]
Sumitani Akio[1], Hiromu Maeno[2]

[1]大妻女子大学社会情報学部教授
[2]大妻女子大学名誉教授、人間生活文化研究所特別研究員

キーワード：パロール，エクリチュール，音声，文字
Key words：Parole, Ecriture, Voice, Letter

1．研究目的

本研究に言う「エクリチュール」とは,「書くこと」すなわち「文字を用いた書記行為」ならびにその所産としての「書かれたもの」を指す.これに対して,「パロール」とは,「話すこと」すなわち「ことばを用いた発話行為」ならびにその所産としての「話されたもの」を指す.日常生活のなかで,我々は,パロールとエクリチュールの二つ,言い換えれば,「話す」という行為と「書く」という行為を基に他者との関係を築き社会を構成しているわけである.

我々は,日々,誰かと話し,誰かに文字を書いて,何らかの情報を発信している.その事実を歴史的にみると,「パロール」は発話する言語の構造的な変容は存するものの,発話行為それ自体の形態に変化はない.ところが,「エクリチュール」の場合は,書かれる言語それ自体の構造的な変化はもとより,それ以上に,書かれたものの形態的な変化をも伴う.具体的には,「肉筆によるエクリチュール」,「木版によるエクリチュール」,「活字によるエクリチュール」あり,そこで用いられる言語の構造的変容もさることながら,書かれたものの形態的変容が人間の意識活動に与える影響は甚だ大きいと言わねばならない.

歴史上,「肉筆のエクリチュール」がその後の人間文化に与えた影響,さらに,「活字によるエクリチュール」が近代社会の成立に与えた影響等々を考えると,社会学的には,「パロール」よりも「エクリチュール」の変容の方がそのインプリケーションは大であるとみても過言ではない.その意味で,音声中心主義を排しエクリチュールの哲学を主唱したJ. デリダの指摘は正しい.

我々のここ一連の研究は,現代の SNS 社会においては,「活字によるエクリチュール」は衰退し,それに変わって,「電子文字のエクリチュール」という第四の段階を想定する.この「電子文字のエクリチュール」が,現代の人間と社会に可視的,不可視的に,多様な影響を与えているのではないか.こうした認識をもとに,本稿では,第四番目の「電子文字のエクリチュール」の孕む問題性をめぐって今少し彫塑を重ねるものである.

2．「電子文字のエクリチュール」の問題性

さて,ここに想定した「電子文字のエクリチュール」の問題性とは何であろうか.

先ず第一に指摘すべきは,文字の「書き方」それ自体についてであり,「普段,我々は,漢字仮名交じり文のシステムに基づいて文を書く.ところが,電子文字の場合は,これまで慣れ親しんだ書記システムを捨て,ローマ字ないし平仮名で打ち込んで,漢字仮名交じり文に変換する.しかも,この変化は,誰も殆ど意識すること無く,無自覚のままに非本来的な方式に沿って電子文字のエクリチュールに委ねていくのである」.だとすれば,電子文字が構成するエクリチュールは,従来の肉筆文字を活字化した結果,そこに出来上がるエクリチュールとは同質のものではありえない.「その影響は,特に日本語の場合,漢字,平仮名,片仮名の組み合わせからな

る文字システムを作り出した日本人の「書く」という意識の変質にも及ばざるを得ないだろう」.実際,今日では,文字を「書く」というよりも,キーボードに向かって,文字を「打ち込む」という意識の方が強くなり,それも,思いつくままに,思考の重みを欠いたまま「打ち込んだ」結果,そこに出来上がる「電子文字のエクリチュール」が氾濫しているのがごく普通の現実となっている.

そうした「書く」という技法の変容から,第二の問題が生じる.すなわち,「言うが如くに打ち込んだ」「電子文字のエクリチュール」の中には,パロールとエクリチュールが融合したかの如きことばが氾濫し,その種のことばは,過剰に感情性の溢れたことばを生み出している事実がある.かかる現状を鑑みて,ノーベル賞作家カズオ・イシグロは,「感情優位社会」という形容を与えたが,筆者もまた,ある講演において,「情報社会は情動社会」という主題のもと,「電子文字のエクリチュール」に内在する感情性の横溢についてその問題点を指摘した.

「感情優位社会」ないし「情動社会」のもと,今日,「電子文字のエクリチュール」は,個人の合理的判断に資するよりも,個人の感情性の刺激に関連する場合が多々見られる.その典型的なケースの一つは,トランプ前米大統領のツイッターが発信するエクリチュールに求められよう.また,SNS による他者への非難中傷のエクリチュールや,いわゆる多様性を認めぬ街頭での他者排斥のヘイトメッセージ等々,今日の「電子文字のエクリチュール」は人間の感情性を刺激するものが甚だ多い.

その方向性は,かつての「活字によるエクリチュール」が理性的個人を析出してきたメカニズムとは真逆というべきであり,現代の若者は,かつての「活字文字によるエクリチュール」よりも,「電子文字のエクリチュール」に接する方が圧倒的に多いのである.

３．言語論の今日的地平へ

社会学という学問は,「活字文字によるエクリチュール」が育んできた近代的個人の存在を基盤として誕生した.しかし今や,「電子文字のエクリチュール」は,合理的判断を下し得る近代的個人の存在を侵食しつつあり,社会の至る所で非合理主義の発生が顕著になって来ている.

なぜ,そのような深刻な事態になってきたのか.その答えの一つは,現代の「電子文字のエクリチュール」の内部に音声言語の要素が入り込んで来たからである.

すなわち,「電子文字のエクリチュール」を俎上に乗せる場合,そこで用いられる言語の基本的な捉え方が従前のままでは事の本質を見失う.従来は言語の表層的な側面の照射に偏り,より深層にまで視野を広げなければ,電子文字のもたらす問題性はみえてこないと言わざるをえない.

敷衍すれば,言語とは,人間の目の前の事象の一つ一つを分節化した結果,ある事物とある言葉の対称性を約束するものとして成立するが,特に,言葉の生成という事象を考える場合には,言葉の分節化を促す不可視のレベル,いわば,無自覚な意識レベルにまで視野を広げる必要性がある.言語の表層的部分は合理性の領域を構成する核となるが,言語の深層レベルの部分は,逆に非合理性の領域に深く関わっているのである.

こうしたアプローチに基づいて把握される言語の有り様が、「電子文字によるエクリチュール」を構成しているとみるのが,本稿の基本的かつ中心的な論点である.

４．まとめと今後の課題

これまでこうした問題は,社会学では,電子メディアの技術的特性に帰せられる傾向があった.しかし本研究は,メディアの特性よりも,メディアが構成する「エクリチュール」に注目する.端的に言えば,本研究は,メディア論からエクリチュール論への転換を図り,それによってこれまでの社会学の有効性を再考する意味合いを有している.

今日,社会学ないし社会情報学におけるメディア論は様々な問題を対象化し,今や語り尽くされた感もなしとしない.何故,メディア論が隆盛を誇ったかといえば,答えは簡単である.メディアの概念が拡張解釈されてきたからである.しかし,一旦,拡張解釈された概念を元に引き戻すことは難しい.そこで本研究では,これまでのメディア論が対象化してきた事象を,改めて「エクリチュール」のカテゴリーを借りて捉え直そうと試みる.そこで案出して出てきた言葉が,「声としてのエクリチュール」というある種の逆説を含んだ表現である.

「声としてのエクリチュール」,この逆説的な表現の内包と外延については,引き続きの課題とし,以上,今年度の「報告」としたい.